

あんパンにかけたベンチャー魂

4月。桜の季節である。日本を代表する八重桜の花びらをあんパンのへそに埋め込み、焼き上げたパンを明治天皇に献上した男がいた。名を木村安兵衛という。明治8年（1875）4月4日のことである。

この日、明治天皇は、皇后とともに旧水戸藩下屋敷に水戸家を訪ねられた。その折、侍従の山岡鉄舟から両陛下にこの季節感たっぷりの献上品が差し出された。

両陛下は献上品を食され、陛下から「引き続き納めるように」というお言葉があったという。これを機に「木村屋」のあんパンは一躍、世に知られるようになった。

世上、あんパンの発明者とされる木村安兵衛は、旧姓を長岡氏という。江戸時代後期の文化14年（1817）、常陸国河内郡田宮村（現牛久市田宮町）に長岡又兵衛の次男として生まれた。

田宮村は水戸街道に20あった宿駅の牛久宿駅を支えた定助郷の一村。助郷村は人馬を

準備し、公用荷物を無償で次の宿駅まで運ぶ役割が課せられていた。

多くの旅人が行き交う宿駅。その賑わいを見ながら育ったであろう長岡安兵衛は、やがて下総房国北相馬郡川原代村砂波（現龍ヶ崎市川原代町）の木村安兵門の長女ぶんの婿養子となる。

木村家を継いだ安兵衛は農業に精を出した。しかし、小貝川の氾濫のたびに田畑が水につかる。被害は甚大だった。安兵衛はついに農業に見切りをつける決断をする。

安兵衛は長男を残し、妻や次男らを連れて東京へ出た。49歳の頃とされる。東京に出ていた木村本家の木村重義を頼り、安兵衛は警備や桑名藩の御蔵番を務めた。

迎えた明治維新。新政府は失業者対策に授産所（職業訓練所）を開設。授産所所長となった木村重義の勧めもあって安兵衛はここで一大決心をする。

「パンを作ろう」

やすべえ
木村安兵衛

Yasubei Kimura

長崎で製パンの業を習った梅吉なる人物を雇い、日本初のパンの店を出したのである。明治2年（1869）のことだ。場所は東京芝・日蔭町（現新橋付近）。店の名を「文英堂」という。

この時、安兵衛数え53歳。ただ、パンという新しい「食」にかかる次男英三郎の存在は心強かった。しかし、不運にも文英堂は大火に遭い、焼失してしまう。

だが、安兵衛はひるまなかつた。翌年（1870）、京橋区尾張町（現銀座更科付近）に「木村屋」の店名で再出発。職人も梅吉から武藤勝蔵なる人物に替え、再びパンづくりに挑戦しはじめた。

当時、軍隊で脚気が流行っていた。パンが脚気回復に有効だとして、木村屋の食パンは海軍兵学寮に納められたが、またしても店は大火に巻き込まれて焼失した。

明治7年（1874）、火に強い煉瓦街が銀座に出現すると、木村親子はその一角に店を構えた。併せて日本人に合う独自のパン作りに挑戦。ついに苦労の末に酒種酵母を発明した。

酒種酵母で生地をふくらませ、中に餡を入

れて焼く。試行錯誤の末、「酒種あんパン」は完成、明治天皇への献上品となった。今に続く「あんパンの木村屋」の誕生であった。

※主な参考文献『木村屋総本店百二十年史』（株・木村屋総本店発行）、『牛久歴史散歩』（木村有見著）、『茨城歴史人物小辞典』（茨城新聞社発行）、『茨城の歴史県南・鹿行編』（茨城地方史研究会編）、『牛久市史』。



銀座本店 - 木村屋総本店

偉人から読み解く「起業」のヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一